



平林博日本大使(当時)は、プロジェクト第2期における大きな理解者だった。事業地を3度にわたって視察した他、カルナタカ州政府に取組み強化を申し入れたこともあった。(写真提供:河上清)

国際協力機構



稚蚕飼育所の室内



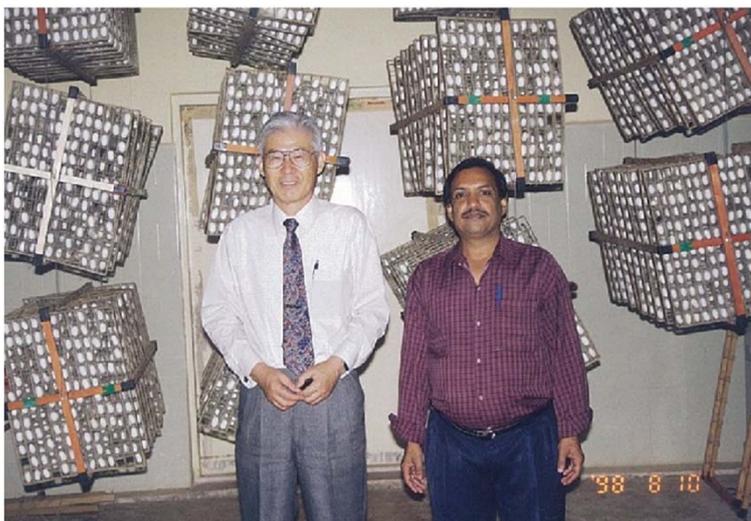
稚蚕飼育所の中の様子。木枠で作られた皿の中で、幼いカイコは生育する。飼育環境には細心の注意が必要だ。(写真提供:河上清)

国際協力機構



稚蚕飼育の実習。一齢から二齢期のカイコは体長も小さく、飼育にスペースを取らない。衛生管理の行き届いた環境の中で健康に育てられる。(写真提供:都田達也)

国際協力機構



プロジェクト第2期、試験的に導入した回転まぶしをバックに写る河上清チームリーダーとCSR&TIカイコ飼育部門のカウンターパートだったV.マトゥール研究員。マトゥールは、上族の専門家としてその後著書を出版した。(写真提供:河上清)

国際協力機構



アンドラ・プラデシュ州ヒンドゥプール周辺で、農民に対して行われた回転まぶしの使用法に関する研修。(写真提供:河原畑勇)

国際協力機構



プロジェクト期間中、現地に派遣されていた日本人専門家は、息抜きも兼ねて、家族も同伴して、南インドの観光地を訪ねたこともあった。(写真提供:河上清)

国際協力機構



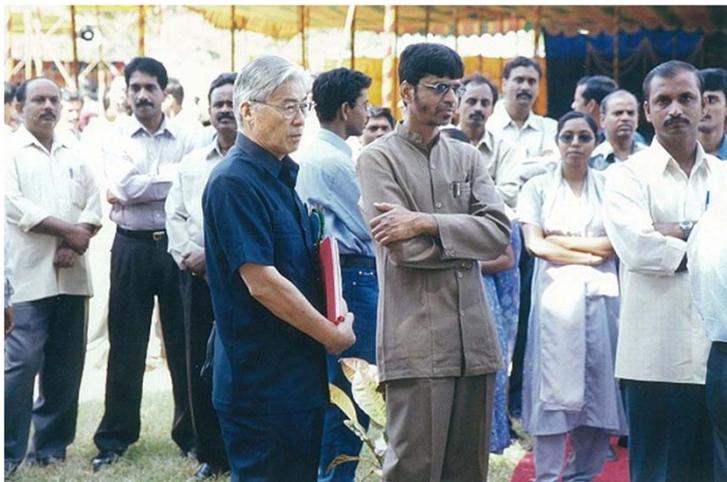
マイソール郊外、スリランガパトナにあるカーヴェリ川の支流合流地点。ピクニックに最適の地として、多くの現地人も訪れる。マイソールにはインド全国から養蚕技術者を研修生として受け入れていたが、1ヵ月にも及ぶ研修の合間のレクリエーションとして、こうした場所へのピクニックが企画された。(2011年6月山田浩司撮影)

国際協力機構



ライトアップされたマイソールの王宮。(写真提供:河上清)

国際協力機構



マイソールで開かれた「クリシ・メラ(農業祭)」と呼ばれたイベントで出展された蚕具の実演を見守る河上清チームリーダーとカウンターパートCSR&TIのS.M.H.カドリ。カドリは当時タミル・ナドゥ州の地域養蚕研究ステーション(RSRS)の所長だったが、現在はマイソールCSR&TI本部の所長を務めている。(写真提供:河上清)

国際協力機構



専門家チームの地方巡回の際の一コマ。日本人専門家も現地カウンターパートと同様、バナナの葉を広げただけの皿の上に乗せられる地元の料理を右手で食べる。(写真提供:河上清)

国際協力機構





蚕糸・昆虫農業技術研究所松本支所では、新たな研修員が来訪すると、所員が自発的に歓迎のパーティーを企画した。こうしたもてなしが研修員の胸を打ち、「MATSUMOTO」はインド人カウンターパートが憧れる、研修の地となっていた。(写真提供:山本俊雄)

国際協力機構



マイソールの中央蚕糸研究研修所(CSR&TI)の創立50周年を記念した月刊誌『インディアン・シルク(Indian Silk)』の特集号(2011年1月)。河上清第2期チームリーダーと山口明雄専門家が寄稿した。日本人専門家とカウンターパートの交流は、今も続いている。

国際協力機構



プロジェクトのカウンターパートの多くは、今も組織に残っている。写真はマイソールの中央蚕糸研究訓練所(CSR&TI)のスタッフ。(カルナタカ州マイソール、2011年6月山田浩司撮影)

国際協力機構